

カナダの 初等・中等教育

関口礼子

カナダにおいては教育は州政府の管轄事項であり、国のレベルでは日本の文部省に相当するようなものはない。したがって、州によって教育制度はまちまちである。バンクーバーの小学校については、先に本誌で紹介されたことがあるので、今回はトロントを含むオンタリオ州の場合を例にとりて紹介してみよう。

オンタリオ州では、学校は、パブリック・スクールまたはセバレット・スクール八年制、セカンタリー・スクール五年制が基本になっている。カトリック教徒は、セバレット・スクールといって別の管轄の学校を設けている。パブリック・スクールの中には六年までしかないところもあるから、その場合はあとの二年間は別の学校に行かなければならない。また、トロントでは幼稚園が発達していて、パブリック・スクールの中に設置されている。他州では、六・三・三制や六・五制、六・二・三制、七・三・二制などが

ある。

カリキュラムの区分は学校区分とは別で、初等教育三年までのプライマリー区分、次の三年間のジュニア区分、次の四年間のインターミディエイト区分、その後の三年間のシニア区分に分かれている。

義務教育は、六歳に達した次の九月から、十六歳に達するまで、あるいは十六歳に達する年の六月末までのうちの、いずれか早い方ということになっている。日本のように義務教育が学年によって定められているのではないので、十六歳の誕生日に達したらその日のうちに荷物をまとめて、「はい、さようなら」と教室を去るケースもあるようである。

カナダの学校運営に関する鍵になることばに「グレード」というのがある。日本の「学年」に相当する言葉である。しかし、「グレード」と「学年」では、考え方が

	在籍数 (1978-9)	学校数 (1976-7)	教師数 (1976-7)
初等・中等教育	5,220,720	13,737	263,680
公立及びセバレット学校	4,310		
海外学校*	179,485	803	9,890
私立学校	34,790	302	1,775
インディペンディアン学校	3,635	26	825
盲・聾学校	n. a.		
職業高校			
高等教育	248,490	186	17,925
コミュニティ・カレッジその他	397,310	67	31,870
大学			

*国防省がベベルギニー、オランダ、西独で勤務する軍人・軍属の子供のために運営している学校。

基本的に異なっている。日本の「学年」が年齢に重点をおいたものであるのに対し、「グレード」はカリキュラムの内容に中心をおいたものである。したがって、毎年毎年与えられるカリキュラムを順調に学習してゆけば、年を経るにしたがってグレードも上がるから「学年」と同じになるが、何らかの理由で学習できなかった場合は、グレードは上がらない。

同一生徒でも、算数はグレード上三だが英語はグレード二、ということも起こりうる。また逆に、成績がよければグレードを跳ぶこともありうる。最近では、こうした各科目の勉強とともに、学校における社会生活という点にも目が向けられるようになってきたので、生徒はなるべく同年齢の者のある学級の中にとどめておくようにしている。したがって極端に年齢の高い子どもが小さい子たちになまじることなく、また、成績がよくてグレードを跳ぶにしても、全期間を通して一回に限るようである。

こうした多種の生徒が、一つの教室の中でともに学習しうするためには、日本で行なわれているような一斉教授法とは異なる教授法が採られなくてはならない。また、一斉教授法こそが学校教育であるというような考え方も、カナダには存在しない。カナダでは一群の生徒が暗算の練習をしている一方で、残りの生徒は机の上で何か本を書き写している、といった風景も珍らしくない。それぞれの能力と進路に合った学習を行なっているからである。

短期経営講座の受講生を募集

カナダ政府から国際ビジネス研究センターのひとつに指定されているウエスタン・オンタリオ大学（オンタリオ州ロンドン）の経営管理学部では、毎年、世界の経営者のための経営講座を設けている。

ひとつは経営幹部のための経営訓練講座で、期間は五週間。もうひとつは国際経営講座（International Management Course）。これは国際市場で起きる経営管理問題に対処する技術を高めるための三週間講座で、多国籍企業など国際的ビジネスにかかわっている企業の幹部が対象になっている。今年の期間は五月十日から二十九日まで。

さて、義務教育は十六歳までで、パブリック・スクールが八年までとすると、どうしてもセカンタリー・スクールに進まねばならない。

セカンタリー・スクール進学は、日本でいえば高等学校進学に相当するものであるが、ここでは試験地獄というような現象はない。入学試験というようなものが存在しないからである。それではどのようなシステムによってこの問題を解決しているのだろうか。

セカンタリー・スクールでは、パブリック・スクールとも異なり、レベルという概念が導入されている。レベルとは学料の難易度で、授業はレベル一から六に、